

小学校現場体験「児童教育演習」の成果と課題

益 田 亮 英

Conclusions and Implications for the “Practicum in Elementary School Education” Obtained
through Teacher Trainee Internships

Ryoei Masuda

1 はじめに

2010年入学生から小学校教員免許取得が可能となって4年目、小学校教員免許取得に焦点を絞った児童教育コースがスタートして3年目となる。実践力のある小学校教師の育成を目指して、小免希望学生に対しては1年次で「教師力演習」¹を履修させ、教師としての資質能力を身に付けるための意識の高揚をめざしてきた。さらに、2年次には「児童教育演習」として小学校体験(観察実習)を全員に経験させている。基本的に出身校で夏休み中の8月末から9月下旬にかけての1週間観察実習を行っている。3年次では、「児童教育実践演習」として、2年次で体験した学校でさらに1週間体験を行う。2010年度入学生については、30名近くの学生が小免を希望した。「教師力演習」による履修前指導の受講やGPAなどいくつかのハードルを設けたために、2年次になって小学校免許を希望したものは19名となり、2011年度に「児童教育演習」として小学校体験(観察実習)を経験したものは9名だけであった。この時の現場体験指導については、研究紀要VISIO No. 41『実践力のある小学校教師の育成を目指して』²で述べたところである。2011年度の入学生からは小学校免許取得に特化した児童教育コースを開設したこと、心理臨床学科やキャリア・イングリッシュ専攻からも小免の取得が可能であることから、多くの小学校教師志望の学生が「教師力演習」を受講するようになった。2013年度の学科、専攻・コース別の小免希望者は表1のようになっている。2012年度は2年生42名が小免を希望し、異文化体験など海外体験に参加した学生を除く39名が「小学校体験(観察実習)」を行った。小免希望者は今後も同様に推移すると思われる。ここで、2012年度に体験した学生のアンケートや受け入れ小学校からの感想等を参考に、「児童教育演習」2年間の実践の成果と課題について考えてみることにした。

表 1 [2013年度 小学校教諭免許希望者]

学科・専攻	4 年	3 年	2 年	1 年	合計
児童教育コース	----	21	23	21	65
キャリア・イングリッシュ	4	5	4	2	15
こども専攻	8	----	----	----	8
心理臨床学科	6	16	12	28	62
合計	18	42	39	51	150(人)

注：こども専攻は2011年から保育コースと児童教育コースに分かれ保育コースからは小免が取得できなくなった。

2 教職課程の取り組み

(1) 教職課程履修前指導と履修条件

教員の質の向上が求められているなかで、本学としては教員養成段階での質の向上をめざし、小学校教職課程履修前指導として1年次からの「教師力演習」の受講を条件付けるとともに、2年・3年次には主に出身小学校での体験を義務付けている。(図1)また、児童教育コース外からの小免希望者についてはGPA等によるハードルを設けている。(表2・次ページ)

本学の教職課程の特徴として、小学校教諭免許プラス1の教員免許取得を挙げ、小学校免許に加えて、中・高英語、特別支援のいずれかの取得を勧めている。心理臨床学科とキャリア・イングリッシュ専攻の専門性を生かしたものであるが、特に、英語免許のある小学校教師及び特別支援のできる小学校教師は学校現場において、今一番求められている人材である。

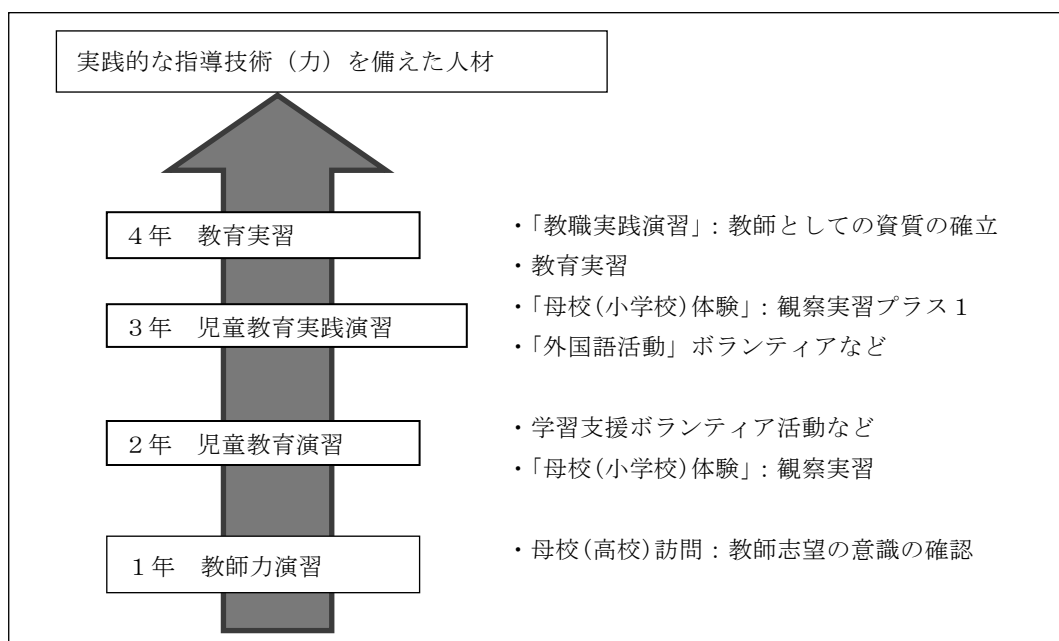


図 1 [4年間の指導の流れ]

(2) 小学校現場体験

履修前指導の中心として「教師力演習」を小免希望の1年次の時間割に組み込み、科目外として実施していることについては、先に述べたとおりである。「児童教育演習」、「児童教育実践演習」としての小学校の観察実習は、小学校現場を体験し、教師の仕事を理解するとともに、教職の魅力を確認し、教育実習をより効果的にするための体験として大学生活のモチベーションを高めることにある。2012年度の現場体験の参加者は表3-1、2のとおりであるが、本稿では、「児童教育演習（観察実習）」について述べる。

表2 「教員免許取得への条件（幼稚園教諭を除く）」

学科・専攻	小学校免許	中・高英語免許	特別支援免許
児童教育コース	---	TOEIC 500	GPA2.5 特別支援体験等
キャリア・イングリッシュ専攻	中・高英語免許 GPA3.0	TOEIC 500	GPA2.5 特別支援体験等
心理臨床学科	GPA3.0	TOEIC 500	基礎免許（小・英・公民） GPA2.5 特別支援体験等

ア)「児童教育演習（観察実習）」

参加者は2年生、小免希望42名中39名（不参加は外国留学、異文化体験）で期間は3日から7日間、時期は8月下旬から9月下旬。

表3-1 「体験の日数と参加者」

日数	4日	5日	6日	8日
人数	2人	35人	1人	1人

イ)「児童教育実践演習」

参加者は3年生、小免希望18名中13名が参加、期間は3日から7日間（不参加はボランティア体験等との期日の重なりなど）、時期は8月下旬から9月下旬。

「児童教育演習（観察実習）」と「児童教育実践演習」については実習の内容に区別を設けていない。2年生は観察を主体として、3年生にはそれより多少の発展した体験を期待しているが、現場体験の回数を重ねることに主眼があるので、内容については小学校の判断に一任した。3年次生の実習内容は授業補助、添削補助、放課後子ども教室などとなっており、授業補助の内容は授業中の個別指導、動植物の世話、運動の審判や指導、家庭科実習の手伝い、校外実習の引率補助などであった。

表3-2 「体験の日数と参加者」

日数	3日	5日	7日
人数	4人	8人	1人

ウ) 事前指導

実施までの事前指導は2年生を対象とした「児童教育演習」の場合は、V I S I O No.42で述

べた。3年次の「児童教育実践演習」については、実習依頼の電話から、事前打ち合わせの交渉などすべてを学生に任せることとした。昨年度体験した学校であること、中には、実習後も定期的に体験を重ね、学校行事等のボランティアとして関係を継続しており学校との信頼関係ができている。などの理由に加えて、自ら自主的に各自の責任の下で行動させるのを目的とした。

また、小学校委員会の教員全員が分担して小学校を訪問し主旨を説明し協力を依頼した。さらに、担当学生については徹底した事前指導を行った。

エ) 事後指導

実習後については、学生のお礼の手紙とともに、大学からは担当者が礼状をしたためた。併せて学生の実習報告書のコピーを送付し、「児童教育演習」の今後の改善・発展に資するため、アンケートによって受け入れ側からの感想や意見を聞いた。

3 「児童教育演習（観察実習）」参加者のアンケート

実習終了後に参加者全員にアンケートを実施した。下記の質問項目について自由記述式で回答を求めた。(回答数36名)

(1) 小学校との事前打ち合わせ

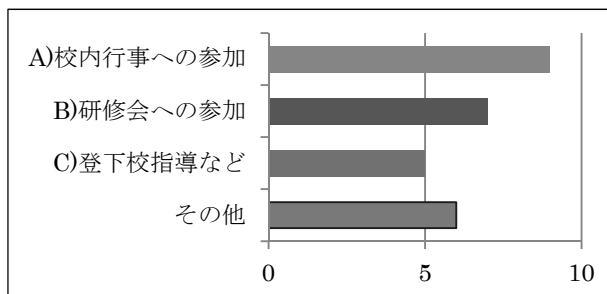
学生は自ら小学校と連絡を取り、日時を決めて挨拶をかねた事前訪問をして、校長、教頭、教務主任、研修担当の先生方と体験の内容や服装、心構え、出勤時間などについて打ち合わせを行っている。2回の事前打ち合わせを行っている学生もあり、1回目に体験の心構えなどについての話を聞いた上に体験したい内容を尋ねられ、2回目の訪問で担当の先生と具体的なことを打ち合わせている。打ち合わせに行って不安が解消されたと感想を述べている。

(2) 体験の主な内容

出来るだけ小学校に負担を掛けないような形で観察実習をお願いしたのであるが、各学校では教育実習に準じた対応をしていただいた。授業の参観・監察のほかに、T2としての授業補助、部活動指導、職員会議や職員研修見学、放課後添削指導等、朝自習の補助、管理職（校長、教頭、教務主任）講話、校外学習指導、体育祭や水泳大会などの補助、授業、登校指導、あいさつ運動等々多様な体験となっている。指導案の書き方の指導や事前指導を受け、研究授業に挑戦した学生もいる。

(3) 印象に残った体験

- A) 運動会や水泳大会など校内行事への参加(9)
- B) 研究授業や職員研修会など先生たちの研修会への参加(7)
- C) 登下校指導など保護者との関わり(5)
- D) 部活動指導など(3)



E) 授業体験(2)

F) 先生の仕事の多様さなど(1)

さまざまな体験をした中で、特に印象に残った体験として、校内行事への参加とともに多かったのが、職員研修への参加がある。先生方がクラスや学年の枠を超えて、熱心に授業研究に取り組み、情報の共有を図りながら切磋琢磨されている様子に感動している。

「6年生の授業について、校内全体で意見を出し合う先生方の姿を見て、“授業をする”ための事前準備の大切さを感じることができた。」などと感想を述べている。生徒側からは見えない水面下での努力、見えない部分での教師の仕事の大切さを体験することができたことが今回の観察実習の大きな成果である。

わずか5日間の体験であるにもかかわらず、多くの学生が職員朝会や全校集会などでスピーチする機会をもらっている。また、担当したクラスの子ども達からはクラスでのお別れの会に加えて、手紙などのプレゼントを戴いている。子どもたちの素直な気持ちに接し、教職の素晴らしさを実感するとともに、今後の学習に対する意欲を高めている。

(4) 今後どんな学生生活を送るか

A) ボランティア、サークル活動(15)

B) 専門の勉強(指導力を高めたい)

(14)

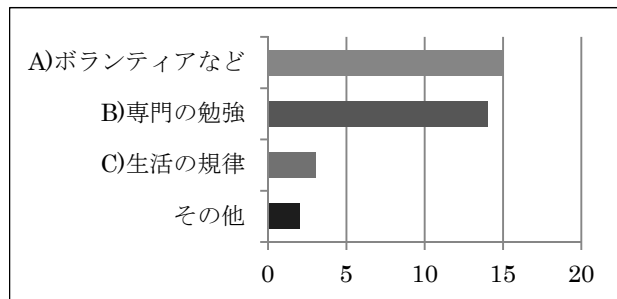
C) 自分自身の生活に規律を求めたい

(3)

D) 模擬授業などの経験(1)

E) パソコン技術などのスキルアップ

(1)



実習を通して現場を知ることの大切さを学び、より積極的にボランティア活動やサークル活動に励みたいという感想と、専門の力や教養を高め指導力をつけたいという感想が圧倒的に多かった。また、採用試験に合格するために受験勉強に取り組みたいなどの回答もあった。2年後期以降の大学生生活のモチベーションを高めることになっている。

(5) 今回の体験で最も役立ったこと

A) 子どもに触れ合ったこと(10)

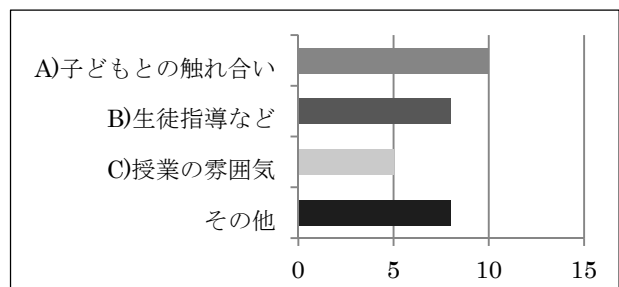
B) 先生の生徒指導・授業展開などの様子を見ることができた(8)

C) 学年による授業の雰囲気の違いを知ったこと(5)

D) 小学校の実情を知ることができた(4)

E) 先生方と話げできたこと(2)

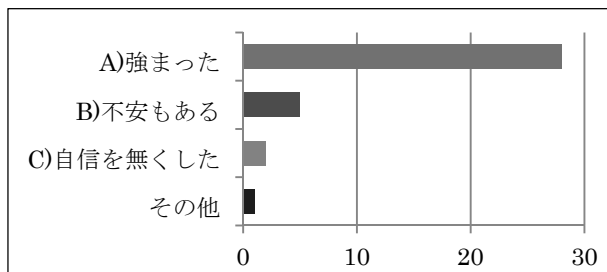
F) 個に応じた指導の仕方を見ることができた(2)



日々の体験のすべてがよかったし、先生という職業のやりがいを感じたということが上記の回答とともに書いてあった。

(6) 先生になりたいという気持ちは
どう変わったか

- A) 小学校の先生になりたいという気持ちますます強まった(28)
 B) なりたい気持ちはあるが不安もある(5)
 C) 自信を無くした(2)
 D) 特別支援学校を目指す気持ちは変わらないが先生の魅力を感じた(1)



参加したほとんどの学生が教職への憧れを強め、学生生活の今後の在り方について意識を高めている。以下学生の回答の一部抜粋である。

- ① 「最初は子どもが好きだからとか、子どもと関わることができ楽しそうだななど、誰もが思う印象ばかり頭の中にありましたが、それとは逆で、楽しいこともあるけどそれ以上に、子どもを教育する大変さ、常に子どものことを第一に考えなければならない仕事に心を打たれました。そして何より、自分の近くで子どもが成長していくのを感じることができる仕事の楽しさに、今まで以上になりたいと思う気持ちが強くなりました」
- ② 「自分が教壇に本当に立てるのか不安になったが、なりたいという気持ちは強くなった。」
 「以前は子どもが好きで、教えることが好きという気持ちで教師を憧れの職業として見ていました。今回体験させていただいて、保護者対応や子どもについての話など、朝会でたくさん話が共有されているのを見て、自分にできるかと不安になることもありましたが、昼休みや給食中など子ども達と関わる時間を通して、また、放課後に先生方とお話をする中でやりがいのある仕事だからこそ教師になりたいと思うことができました。」
- ③ 「中途半端な気持ちで目指してはいけなと感じました。しかし、そんな中で“先生になりたい”という気持ちもさらに強くなりました。これは実際に体験したからこそ思えたことだと思います。また、子ども達に信頼されるような先生になりたいと思いました。教員になるためには、いかに真剣に取り組むかだと思います。今回先生方の必死な姿を見て、もっと真剣に取り組まなければならないと実感しました。」

4 学生の感想

体験報告書の感想では子ども達から「先生」と呼ばれたことへの感動とともに、授業展開の工夫や教材研究の大切さはもとより、教員の職務の多様性に驚き、教師に求められる人間性の大切さに気付いている。以下一部を紹介したい。

- ① 今まで知らなかった陰の仕事についてたくさん学ぶことができました。宿題やテストなどの採点はもちろんのこと、子どもの下校後の見回り指導、職員会議、授業の打ち合わせなど、子どもたちが知らないところで様々な活動をなさっており、改めて教員という仕事の大切さ、また重要さについて学びました。
- ② 様々な学年・クラスの授業に参加させてもらい、すべてのクラスに独特の雰囲気があり、同じようなクラスは一つもなかった。先生方の日頃の指導や特色が色濃く反映しているのだ

と痛感した。と同時に、どのクラスの授業でも一貫している点があった。それは子どもが主体となって授業が展開されている点である。

- ③ 先生のお手伝いをして仕事がとても多く、そこまでやるのかと思うこともありました。一番びっくりしたのは、身体測定が終わった3日後に、担任の先生が、子どもの身長に合わせて机のサイズを変えていたことです。しかも一人で約30人分の机といすのサイズを合わせていらっしゃいました。
- ④ 6年2組で算数の授業をさせていただきました。1週間授業を観察して、どういうタイミングで発問したらよいか、どのように展開したら興味を示してくれるか念頭に、先生から指導案の書き方や授業の進め方などアドバイスを受けながら指導案をつくりました。授業は子ども達に助けられながら終わりました。放課後に、先生方から、自分ばかりしゃべりすぎない、少人数で話し合う回数を増やす、途中で必要なことを板書する、子どもたちが答えを言いやすいような配慮をするなどたくさんのアドバイスをもらいました。先生方のアドバイスを受け、子どもたちの送っている信号に気づくことを教わりました。
- ⑤ 子供たちに「先生」と呼ばれる度に、ここでは学校の先生と同じ立場として見られていること、自分の発言、行動には相応の責任が伴うことを強く実感しました。同時に、「先生」の立場で一緒に過ごした5日間は、私に夢を再確認させてくれました。教師になりたいという気持ちがはっきりとしたものになり、明確な目標となって帰ってきました。
- ⑥ 3日目と最終日に授業をしました。担当の先生に指導書や指導案集、教科書などを借りて指導案を考えました。授業が終わって先生から板書の仕方や今後のアドバイスを書かれたメモを戴きました。1回目のアドバイスをもとに2回目に臨みました、難しい面も多々ありましたが楽しい面、うれしい面もありました。担任の先生から今後大学で学び直すことや、1回目と2回目を比較してアドバイスをいただきました。たった2時間の授業でしたがたくさんのことを学ぶことができました。最終日に子ども達からもらった色紙に、「先生の国語のじゅぎょう、とてもおもしろかったです。」「先生の授業、すごくわかりやすかったです。」「算数のとき教えてくれてありがとうございました」という言葉がつづってあり、授業計画は大変だったけど、それ以上に喜びを得ることができ、同時にやりがいを実感しました。
- ⑦ 放課後、校内研修に参加しました。6年生の算数の授業に関する研修でしたが、校長先生や教頭先生、他学年の先生方も一緒に考えられており、先生方の連携・協力を感じました。資料の内容がとても細かく、先生方一人一人が真剣に考え、たくさんの意見を交わしていらっしゃいました。1時間の授業への準備がとても大変だということを知って感動するとともに、先生方に対して感謝の気持ちを持ちました。

5 受け入れ校のアンケート

後日、体験校にアンケートを依頼した。42校中26校から回答を戴いた。回答者は校長(8)教頭(13)、その他(5)で、すべて記述式で答えてもらった。

(1) 服装や態度、言葉遣いなど観察実習に対する姿勢について

- ・服装・態度・身だしなみや挨拶など事前指導がよく行き届いている。(24)

- ・多くのことを学ぼうとする意欲が感じられた。(12)
- ・子ども達ともよく遊んでくれた。(9)
- ・さわやかで好感が持てた。(2)
- ・職場が活気づいた。(1)
- ・真面目に取り組んでいた。(1)
- ・文字が稚拙である。(1)
- ・挨拶が十分できない。(1)
- ・レポートが事実の記述のみに終わっていた。(1)
- ・指示待ち（消極的）の面があった。(1)

服装・態度や先生方への挨拶などの基本的な面ではほぼ好意的に受け止められていた。1校だけ、あいさつが十分できない、指示待ちの面があったとマイナスな回答があった。

(2) 体験前に必要な指導について

- ・卒業までに人権を尊重する態度、自尊感情、コミュニケーション能力を育んでほしい。(7)
- ・教師としての使命感ややる気、情熱を育てておいてもらいたい。(3)
- ・授業スキルを身に付けてほしい。(2)
- ・指導案が書ける力をつけてほしい。(1)
- ・一人一人が確かな「目指す授業像」を身に付けてもらいたい。(1)
- ・板書の練習が必要。(1)
- ・実習の事後指導が必要(1)

下記のことに重点を置いて事前指導を行っているが、さらに検討して充実を図りたい。

[主な事前指導事項]

- ① 受け入れ校に対して、常に感謝の念を持つ(挨拶、積極性)。子どもたちへの言動に気を配る。
- ② 連絡や相談、報告を徹底する(体験校や大学に対して)。メモを取る。
- ③ 教師としての振る舞いをする(言葉遣い、服装、頭髮など)。
- ④ 時間を守る。
- ⑤ 子どもとの学校外での接触、メールアドレスや携帯番号の交換などはしない。
- ⑥ 個人情報など秘密を厳守する。など

(3) 小学校インターンシップの受け入れについて

小学校免許希望者に、3、4年次に体験(インターンシップ)を主とした科目として「児童教育フィールドワークⅠ、Ⅱ」(2単位、選択)を開設することにしている。この科目の受け入れに對しの質問では、具体的な提案がないと答えられないという意見も数件あったが、教師としての資質を磨き、実践的な指導力を育むうえでは、理論と実践を融合した取り組みが必要であり、半数以上の19校から主旨は賛成という意見とともに次のようなコメントも併せてもらった。

- ・実践的な指導力を身に付ける上で組織的に週1回でも実務体験をすることは大切なことである。
- ・早い段階から現場の様子を知り、課題意識をもって継続的に実習を行うことはとても意義が

あると思う。

- ・学校と大学のニーズに合う形で実践できるのであれば意義ある活動になると思う。
- ・きめられた曜日であれば、教科等が限られてしまう、幅広い実務体験を望むのであれば曜日の固定は避けたがよい。
- ・教育課程の流れがあるので週1回の飛び飛びの実務体験では流れがつかめず効果が薄いのではないか。
- ・学校現場では日々の課題対応で余裕がないのでインターンシップの継続的な受け入れは困難である。
- ・受け入れ側のカリキュラム作成や評価などで負担がふえるのではないか。
- ・学校現場としても助かるが、守秘義務などの常識を身に付けておくことが必要。

学校の教育活動の流れには学期はじめや学年末など、受け入れ不可能な時期などを考慮すればインターンシップは実施可能と思われる。しかし、継続的でより効果的なインターンシップを実施するためには、展開に工夫をして週1回決められた時間だけ体験するようなことでなく、体験の時期や期間の決め方については柔軟な対応が必要である。

6 成果と課題

「児童教育演習」の成果として、①教職に対する職務の理解と教師への意欲の喚起があげられる。現場の先生方は、大変多忙な中に、後輩を育成することにとっても協力的で積極的に、愛情を持って受け入れて下さったということが学生の報告書やアンケートから読み取ることができる。ほとんどの学生が、先生方の日々の活躍の様子を見てますます小学校の先生になりたいと意欲を強め、さらに視野を広げ実践力を身に付けるために次年度の体験はもちろんさまざまな小学校ボランティア体験に参加したいと言っている。職員会議や学年会、職員研修会などに参加することによって、学校現場が抱える悩みや課題に触れる機会を得たことは大きな成果である。現場が直面する課題に職員が組織としてどのように取り組んでいるかということ垣間見ることができたことは、これからの学びの質を向上させ実践的な力の醸成につながるのではないか。

次に、②教育実習へのプロローグとしての役割である。教育実習は、学習指導案作りや授業の教材研究に追われ、様々な学びをする余裕がないのが現実となっているため、教育実習までに現場になじんでおくことは意義深い。先進的な県の教育委員会は教員養成セミナー³など教師を目指す学生に対して、教員に必要な実践力養成をサポートしている。また、自由民主党の教育再生実行本部の第2次提言（平成25年5月23日）によると、このような教員養成段階における「教師塾」を全国展開する方向性が示されており⁴、理論と実践の融合を図りながら地域の小学校と連携しつつ実践力養成を目指さなければならない。本年度からスタートする「教職実践演習」は、教科に関する科目及び教職に関する科目の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認するもの⁵となっているが、教育実習や「教職実践演習」を更に充実するためにも「児童教育演習」の役割は大きいと思われる。

さらに③教師に対する適性を見極め進路決定の一助となっていることがあげられる。体験を通して自信を無くしたと答えた学生2名のうち、一人はその後実習校で登校指導などの頻繁に体験を重ね「目標に向かって努力中である。」また、もう一人は、教職をやめて海外留学へと進んだ。

観察実習は体験した全員を教師へと駆り立てることが目的ではない。体験を通して自らの適性を考え新しい進路を決めることもキャリア支援としての観察実習の目的の一つであり体験を経験することによっての進路変更は本人にとっては大変有意義なことである。そのような意味でも様々な進路変更が可能な時期に経験の機会を設けることの意味は大きい。

また、課題としては次のことが考えられる。「児童教育演習」及び「児童教育実践演習」の2年間の実践から、所期の目的を達成していることは間違いなく、今後とも継続する意義は十分あるが、「児童教育演習」は短期集中型の体験であり、現場と大学を往復しながら課題解決を行うようになっていない。そのような観点からも2014年度入学生から開設される「児童教育フィールドワーク」との連携した展開が期待される。さらに、今後小免希望学生は増え、2年次の「児童教育演習」、3年次の「児童教育実践演習」さらに4年次の「教育実習」と多くの学生が学校現場に赴くことになる。体験実習の主旨を徹底するとともに、事前指導を通して守秘義務の徹底など教師としての服務条件など十分な指導を行い、受け入れ校に決して迷惑を掛けたくないような配慮が必要である。教育実習でもそうであるが、現場体験実習はこれから教師を目指す学生や大学にとっては大変有意義なものである。しかし、小学校の正規の教育活動の中に部外者が踏み込むことであり、次の教育者の育成のためという大義名分はあっても、決して一方にだけ負担をかけるようであってはならない。送り出す側として心掛けなければならないことは、小学校の教育活動を混乱させることがないようにすることである。

7 まとめ

大学での学修の質を高めるために、「児童教育演習」を通して啓発的経験をしたことの意義は大きい。教員採用試験では、筆記試験以外に面接、集団討論、模擬授業、論文等と多様な試験を乗り越えて採用になる。現役の学生は、教育実習や小学校体験、ボランティア活動などの様々な体験を重ねながら、採用試験対策の勉強に全力を注がなければ10倍の難関を突破することはできない。臨採などの経験のない現役合格の学生は、いわば温室育ちである。このため、これまでの人生で経験したことのないもろもろの課題に直面した時の戸惑い、いわゆる“初任者ギャップ”を乗り越えるだけの“たくましさ”を身に付けなければならない。文部科学省の統計によると、条件付き採用期間を経て依願退職者の数が300人にならんとしている。⁶個々に異なった理由があり“初任者ギャップ”がすべての理由とは思わないが、教職課程を履修する中で多くの体験を経験して“たくましさ”を身に付けることによって多少は軽減できると思われる。「小学校フィールドワーク」を履修し、インターンシップをすることで理論と実践の融合を深め、現場対応力を育成したい。

2011年、2012年と2年間の「児童教育演習」や「児童教育実践演習」の小学校体験を通して感じたことは、小学校の先生方が後輩を育てるとことに対して大変好意的に受け入れるという愛情の深さである。自らは、学級の児童の世話、教材研究など大変多忙にも関わらず夜遅くまで指導していただいた。体験校からの様々な意見を真摯に受容して教職課程指導のより一層の充実を目指したい。

今回のアンケートによると、学生の実習に取り組む姿勢などにおいて評価は高かった。教師の質保証という意味から、入学当初から「教師力演習」や「児童教育演習」「児童教育実践演習」を

通して継続的に教職についての意識付けを行うとともに、教職課程の初期の段階からGPAなど厳しい履修規定を設けているため、学生が熱心に真剣に取り組んでいることもある。専門知識を本格的に養う前に、よい教師になる可能性を持つ学生を機械的に排除するような履修規定の運用を安易に行わないように心がけながらキャリア支援の充実に努めたい。

注

1. 研究紀要V I S I O No. 42 pp. 11-21『実践力のある小学校教師の育成を目指して』
2. 研究紀要V I S I O No. 41 pp. 9-20『教職科目履修前指導の試みー「教師力演習」を事例としてー』
3. 京都府教育委員会「教員養成サポートセミナー」、岡山県教育委員会「教師への道」インターンシップ事業など
4. 教育再生実行本部第2次提言（自由民主党）平成25年5月23日
○一部の教育委員会において開設されている「教師塾」を全国展開し、採用前の教員養成段階においても教育委員会が一定の責任や役割を果たす体制を整備
5. 教育職員免許法施行規則の一部を改正する省令及び教員免許更新制の実施に係る関係告示の整備等について（通知）平成20年11月12日
教職実践演習は、当該演習を履修する者の教科に関する科目及び教職に関する科目の履修状況を踏まえ、教員として必要な知識技能を修得したことを確認するものとしたこと。（施行規則第6条第1項の表備考第11号）
6. 平成23年度公立学校教職員の人事行政状況調査について（文部科学省より）
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2012/12/26/1329088_01.pdf